中期西田哲学における質料概念の意義

日高　明

序

西田幾多郎が著作『働くものから見るものへ』において独自の場所的論理を形成する過程で、「基体」という概念を頻繁に用いていたことはよく知られている。この概念はアリストテレスの ὑποκείμενον に由来し、「主語となって述語とならないもの」と規定される。西田の「場所」という発想は、この「主語となって述語となならないもの」という基体の定義を逆に「述語となって主語とならないもの」と読み替えたことによって一つの定式を得たと言える。場所論成立における基体の役割については、これまでの多くの研究がなされてきた。しかしながら、西田が受容した基体概念の一つの側面、すなわち質料としての基体概念については見落とされてきたように思われる。

本論文では、まず基体を直覚とする西田の基体理解の問題点を確認した上で（第一節）、プロティノスがアリストテレスの基体概念をプラトンの受容者（ὑποδοχή）あるいは場（χώρα）の概念と結びつけていく経緯を概観し（第二節）、このプロティノスにおける基体＝質料概念を西田がどのように受け取ったかを考察する（第三節）。ここから、その質料概念が西田の思想にどのような役割を果たしたかを論文「内部知覚について」を中心にして検討し（第四節）、加えて『働くものから見るものへ』の時期の西田が、自身の「場所」概念に近いものとみなしていたプロティノスの「一者」も、質料の概念と切り離しえない形で理解していたことを明らかにする（第五節）。これによって、『働くものから見るもの

へ』における質料概念の意義を確定したい。それを通して、場所論の準備期とも言えるこの時期の西田の思想を、これまでの研究とは違った新たな角度から見てみたい。

一　直覚としての基体と論理化の問題

アリストテレスの基体は一般に個物とみなされており、西田自身もたとえば『働くものから見るものへ』に収録された論文「内部知覚について」の第三節において、「主語となって述語とならないもの」とは「一あって二なき個物でなければならぬ」（三、三二五）(1) と言うように基体を個物と考えている。ただし個物はそれだけで自存するものでなく、直覚に基づくとされている。先の引用の直後に「私はかかる個体概念の根底には、何等かの意味に於て非合理的なるものの直覚がなければならぬと思う。……直覚の概念化せられたものが個体概念である」（三、三二六）とあることからもそれが分かる。西田は、固定化された個物よりも、むしろ個物がそこから抽象されるところの直覚を「主語となって述語とならないもの」、すなわち基体として解釈する。

それではそのような直覚とはどのようなものなのか。西田自身の説明を引用する。

> 一歩一歩の意識作用は明である、「此物は赤い」とか「此物は重い」とかいう判断によって言い表される。此作用は無限の層を成すであろうが、かかる判断の主語となるものの直覚はいつでも明白である。……主語となるものは未だ現在というべきものでもなく、此というべきものでもない、未だ客観化せられない内容である、判断の主語と認識主観とが一つである。（三、三二四）

「此物は赤い」という判断において、判断文の主語は「此物」という個物であるが、この形式上の主語は、西田によれば本来の主語ではない。判断において、それについて述語付けがなされる真の主語とは、「これ」として客体化される以前の直覚である。この直覚は、判断における特殊や一般がそこから派生するところの直接経験である。この直接の経験はわれわれにとって「いつでも明白である」。このように基体が直覚として言い表されることは、西田の思想においてどのような意味を持っていたのか。

西田がその初期から追究してきたのは、あるがままの現実であった。そしてこのあるがままの現実とは、主客の区別を設ける思考様式によっては捉えられないものであった。『働くものから見るものへ』に至るまでに西田の思想は次第に変化するが、この主張は一貫している。『善の研究』で主客合一の純粋経験として示されたものは、『自覚における直観と反省』においてフィヒテの事行に従って意志の自覚に求められる。『働くものから見るものへ』の第一論文「直接に与えられるもの」や第二論文「直観と意志」では、西田はこの意志的自覚の立場に立っている。この立場からは、経験界は「思惟内容の内面的発展」であるとされ、逆に意識現象は「対象の内在を本質とする」とされる（三、二六四）。つまり、思惟と対象とが「統一ある連続」（三、二六六）を成す。この統一が意志である（同所）。西田によれば意志の極致が直観であるが、直観とは「主と客とが純なる一つの働きとなることであり、精神的なるものが自己自身を発展することである」（三、二八五）。しかし精神的なるものが自発自展するといっても、その発展の仕方は一方向的なものではない。「意志は、単なる運動ではない、単なる変化ではない、終が始に含まれて居る」（三、二八六）と言われるように、それ自身がそれ自身の目的へと向かっていくという自覚的なものである。この意志の立場においては、知るということも、意志の活動に還元される。『働くものから見るものへ』に収録されている諸論文のうち、「直接に与えられるも

の」「直観と意志」「物理現象の背後にあるもの」まで、西田は知ることを働くことの一部として考えているが(2)、これは以上のような意志的自覚の立場からするものである。しかし、このような意志的自覚の立場からは、その立場自身の論理的根拠が明らかにされない。阿部正雄の言葉を借りれば、「真実在として主体の奥底深く求められた、そのような絶対意志とか直観は、ますます神秘主義的色彩を濃くしていって、概念的知識とかけはなれてゆく」(3)という事態が生じるからである。こうして、思想の論理化が『働くものから見るものへ』において大きな問題となる。それは直接的な経験をそのままに表明するのではなく、直接的な経験と判断による概念的知識との関係を明らかにすることであった。そのために西田は、「判断と直覚とは如何なる関係に於て立つのであろうか」(三、三二八)という問題に取り組む。基体概念も、この論理化という目的のために導入された。つまり西田は、「アリストテレスのヒポケーメノン即ち基体によって、主語、本体、主観の結合統一を企図した」(三、二五四)のである。このような思想の論理化という西田の意図を考慮するならば、「判断の基体は直覚である」という説明は、そのままの形では意味をなさない。なぜならばそれは、判断が直覚に基づくという事実を直接的に述べただけであり、直覚がどのように判断的知識を成立させるのかということを明らかにしていないからである。

以上のように、西田はアリストテレスのように「主語となって述語とならないもの」としての基体を単に個物としてみなすのでなく、さらにその基となる直覚として理解していた。しかしながら、アリストテレスの基体概念はいわゆる個物にとどまるものではない(4)。質料と形相との結合体としての個物が基体として理解されるとともに、時には質料に、また時には形相に基体が求められることもある。このアリストテレスにおける基体概念の多義性が、西田の基体概念の受容にも反映している。西田においては、直覚としての基体とは異なる「主語となって述語とならない」基体を見出しうるのである。それは質料としての基体である。そこには、西田が「プラトン、アリストテレスの考を徹底せしめ

た」と評するプロティノスの質料概念が介在している(5)。後に見るように、この質料としての基体という考えは、先の直覚と判断との関係、すなわち「思想の論理化」という問題に深く関係する。

二　アリストテレスとプロティノスにおける基体

従来の西田研究では、アリストテレスの基体を個物として前提しているものが多い。しかし、さまざまな箇所でアリストテレスは質料を基体とみなしている。ただし質料は問題的な概念であり、その内実は一義的に確定されない。たとえば銅像にしても、その結合体における質料は銅であるが、当の銅は純粋に質料と呼ばれうるものではなく、形態をはじめとして色や質感など様々な属性を持ったものである。質料と形相との区別は相対的であるとも言える(6)。本節では、問題設定の範囲上アリストテレスの質料概念に突っ込んだ考察を行うことはできないが、質料が基体との関係でどのように語られているかを確認しておきたい。

『形而上学』Z巻第三章では、実体と呼ばれうる四つのものが示されている。すなわち、本質 τὸ τί ἦν εἶναι と、普遍的なもの τὸ καθόλου と、類 τὸ γένος と、基体 τὸ ὑποκείμενον である。このうち基体が第一の実体であると言われるのであるが、この基体と呼ばれるものも形 εἶδος、質料 ὕλη、結合体 τὸ ἐκ τούτων の三つに分けられる。そしてアリストテレスは、「基体というのは、他の事物はそれの述語とされるがそれ自らは決して他のなにものの述語ともされないそれのことである」(*Met.* Z, 1028b36-37)(7)という定義を忠実に守るとすれば、基体の最たるものは質料でなければならないと言う。というのも、ここでアリストテレスは事物からあらゆる属性すなわち述語を取り除くという思考実験を行っているのだが、そのようにすべての述語を除いてしまえば、質料以外は残らないからである。この場合質料とは「そ

れ自体はとくになにであるとも言われず、どれほどの量であるとも言われず、その他、ものの存在の仕方がよってもって規定されるものどものいずれによっても言い表されえない或るもののこと」（*Met.* Z, 1029a20）であり、肯定的な規定どころか否定的な規定さえ持たないものであるとされる。質料としての基体は、ほかの述語の主語となるものであり、それ自身としてはいかなる述語形態でもないために、それ自身は特定の何ものでもない。

こうして、「主語となって述語とならない」という基体の定義を遵守するならば、それ自身は何であるとも規定されていない質料こそがこの定義に適ったものとなり、それ故に実体と考えられることになるはずだが、アリストテレスはこれを即座に否定する。「なぜなら、離れて存するものであること（離存性・独立性 τὸ χωριστὸν）とこれと指し示しうるものであること（個体性 τόδε τι）とが最も主として実体に属すると認められている」からである(8)。長さや幅や深さその他の述語としての諸性質を抽き去ってしまえば、それは均一に広がる無性質のものとなり、それゆえに何ものからも離存・独立しておらず、またこれこれのものとして指し示しうるものではなくなってしまう(9)。そのような特定のなにものでもないような不可解なものはアリストテレスにとって実体とは認められない。Z巻第四章以降、アリストテレスの考察は形相や本質といったものに割かれる。質料には、次のH巻になって「可能態としての実体」という役割が与えられることになる。

結局のところ質料としての基体は真の実体としては認められなかったのであるが、ここでのアリストテレスによる基体についての考察は、「主語となって述語とならない」という説明方式を極端まで突き詰めていくと、それ自体としてはどのようにも述語付けできないものに行き着くということを示している。このとき、それはもはや主語とさえならないものであろう。なぜなら、これこれとして言述のうちに表しうるならば、一つの規定をすでに持っていることになるからである。

アリストテレスの質料概念は、プロティノスにおいて大きな変更を加えられる。アリストテレス自身は先にわれわれが確認したように「どのようにも言い表されえない或るもの」としての質料に重要な意味を見出すことはなかった。それに対してプロティノスはこのような第一質料とも言うべき質料を、プラトンにおける「受容者 ὑποδοχή」と同一視しつつ、自身の思想に取り込む。『エネアデス』第二巻第四篇において、次のように述べられている。

> いわゆる素材は「下に横たわる何か」（基体）であり、形相の「受け皿」（受容者）であるという限りでは、このような本性（素材）の観念を持つにいたったすべての人たちが、それ（素材）について、このだいたいの共通の説を主張しており、ここまでは同じ道を歩んでいる。（II4, 1, 1-4）[9]

ここでプロティノスは、質料は基体であり受容者であるという見解を示している。アリストテレスにおいては質料も基体として考えられており、「主語となって述語とならない」という定義を徹底すれば、どのような述語（性質）も持たない無限定の質料に行きつくのであった。このような質料はプラトンの受容者と近似性を持つ。アリストテレス自身も、『自然学』のある箇所において、プラトンは『ティマイオス』中で質料と場（受容者）とを同じものであると言っている、とさえ述べている（*Phy.* IV, 2, 209b11）。実際のところは『ティマイオス』中で受容者を質料と結びつける記述はないため、これはアリストテレスの誤解であるが、この誤解はアリストテレス自身が質料と受容者とを近いものとみなしていたことを示している。プロティノスが基体と受容者とをともに質料を指し示すものとして挙げているのは、このようなアリストテレスの質料理解に基づくものと思われる。プロティノスが質料＝基体＝受容者という見解を「共通の説」としてここに紹介していることを考えると、当時一般的に知られていた見解であったと推測される。

質料は形相を受け取る受容者であり、形相の下に横たわる基体である。「形があるならば、形を与えられたものがある。差異はこれに宿るわけである。したがって、形相を受け取る素材というものが存在する。そして、（形相の）下に横たわるもの（基体）が常にあるわけだ」（II4, 4, 5-7）。しかしながら、このような受容者としての質料は無形・無限定であり、存在者としてみなしうるいかなる特徴も持たない。プラトンの『ティマイオス』中での受容者についての説明を借りれば、あらゆる種類のものを自分自身のうちに受け入れようとするものは、どんな形も持たないものでなければならない、ということになる（50E）。「君が英知によって（思考上で）その多様性と、諸々の形と、諸原理と、直知対象（内容、観念）を（すべて）取り去るならば、これらの前に（奥に）あるものは、無形で無限定で、それの上、あるいはそれの内にあるこれら（諸形相）のどれでもないからである」（II4, 4, 18-21）。ここでプロティノスは、アリストテレスが形而上学Z巻で行った質料についての述語取り除きの思考実験にも似た仕方で質料の無限定性を説明している。

この第一質料ともいうべきものに至って、基体はそれ自身が「主語となって述語とならない」ものであり、述語の枠組み（形相）によって限定されえないものとなる。定義ができず、それ自身についてなにも述定できないならば、このような無形で無限定な質料をいったいどのようにして知ることができるというのだろうか。プロティノスは次のように説明する。「無限定なものは無限定なものによって（のみ知られるはずであろう）。なるほど無限定なものについての定義は限定されたものでありうるが、無限定なものへの（精神の）まなざしは無限定である」（II4, 10, 4-5）。無限定なものについての定義（述語付け）は限定されたものであり、そのためこれは無限定なものを限定されたものによって知ろうとすることとなり不可能である。しかし「無限定なものへのまなざし」は無限定であり、これによって知ることができるというわけである。そしてこの「無限定なものへのまなざし」とは、暗闇の中の視覚のようなものと説明される。

たとえば暗闇が目にとっては（光が取り去られて）見えないすべての色の素材であるように、魂もまた、感覚される対象の上にあらわれる限りのもの（形相）――これらは（先のたとえの）光に相当するが――をすべて取り除いて、そして後に残ったものをもはや限定（規定）できないで、暗闇の中の視覚に似た状態となる。つまり、自分がいわば（見る）対象と、ある意味でおなじもの（無限定なもの）に、その時なるのである。（II4, 10, 15-18）

感覚的対象から形相をすべて抽き去ると、残るのは「無限定の何か」である。この時の魂のまなざしは暗闇の中の視覚のように、見る対象（暗闇）と同じ無限定なものとなる。これは何もみないということではなく、「形のないものの何か印象みたいなものを受ける」（II4, 10, 23）ということであり、何かを見ているのである。しかしながら、「暗闇の中の視覚」に喩えられた魂のまなざしは、「おぼろげなものをおぼろげに、暗いものを暗く、直観しないで直観する」（II4, 10, 31-32）のであって、決して「AはBである」という正しい述定形式において知ることはできない。そのため、プロティノスはプラトンの受容者についての説明（52B）に倣って、質料を「私生児的な思考によって把捉されるもの」と呼んでいる（II4, 10, 9-12）。プロティノスの思想体系において、以上のような質料は、一者からの発出の最下位に置かれている。

三　西田によるプロティノスの質料概念の受容

以上に見てきたような、プロティノスの質料解釈は、西田にも影響を与えている。西田がプロティスの思想を積極的に受容した跡が見られるのは、論文「表現作用」においてであるが、この論文に先立つ「内部知覚について」ですでに

質料を基体とみなしている。われわれの課題は、この論文「内部知覚について」においてプロティノス経由の「質料＝基体＝受容者」という発想が西田においても受容されていることを確認し、それが西田の思想にどのような影響を与えているかということを見極めることである。「内部知覚について」での論述を整合的に読み取るために、まず以下では一九二四年度の特殊講義(11)における西田のプロティノス解釈を、質料概念を中心に見ておきたい。この講義は「内部知覚について」の執筆と同時期に行われたものである。西田はここでアリストテレスの基体を質料として扱っており、また基体をプラトンの受容者と引き合わせたプロティノスの質料概念を大きな問題として受けとめ、さらにはこのプロティノスの質料を一者へと近づけて理解しようとしている。

西田はプロティノスについてまず、「プロチノスの考では、一番実在の本となるものは「一者」(das Eine)である。……それから「精神」(Geist)「霊魂」(Seele)「自然」(Natur)「物質」(12)(Materie)という順序になっている」(一四、三五三―三五四)とプロティノスの実在の区分を紹介した上で、この区分の順に説いていく。物質(質料)に関する箇所は、「プロチノスの「物質」の考は余程むづかしいが、それだけまたおもしろいところがある。……プロチノスの「物質」の概念はプラトン、アリストテレスの考を徹底せしめたものと考えられる」(一四、三六一)という言葉で始められている。西田によれば、プラトンは質料を「受け取る場所」(χώρα)あるいは「空間」として考えた(13)が、「しかしプラトンの空間には、我々が普通いうところの空間の思想が混じていて、純粋なAufnahmeort〔受け取る場所〕ではないらしいところがある」(一四、三六三)という。対して、アリストテレスの場合は、質料を受け取る場所としてではなく基体として考えた。「物が変わると言うは何物かが変わるのであって、それが即ち質料である。アリストテレスのSubstratum〔基体〕である。」(同所)。そして「プロチノスの「物質」の考はこの両者を結合せるものである」(同所)。結合したというのはどういうことかというと、「プロチノスの「物質」についての考は、アリストテレスの考を徹底せしめて、プラ

トンの「受け取る場所」という考に立ち戻るところにあると思う」（同所）と述べてられている。

以上のように、西田は講義において、プロティノスを踏襲しつつアリストテレスの基体を質料として、さらにプラトンの受容者として見做すという理解をはっきりと示している。ここで西田が想定しているアリストテレスの質料とは、銅像における銅のような単なる材料ではなく、われわれが先に確認したような、「それ自体はとくになにであるとも言われず、どれほどの量であるとも言われず、その他、ものの存在の仕方がよってもって規定されるものどものいずれによっても言い表されえない或るもの」（*Met.* Z3, 1029a20）のことであろう。アリストテレスは、このような第一質料とも言えるようなものは第一の実体ではないとしてこれを排除していたのであった。しかし西田は、プロティノスの質料概念のうちに、プラトンの受容者へと立ち戻ったアリストテレスの基体概念を見出したのである。プラトンの「受け取る場所」とアリストテレスの「基体」とを結合させたプロティノスの「質料」は、形相を受け取るものとして、「形体のない、大きさのない、性質のないものとなる」（一四、三六四）。場所の思想の成立にとって重要と思われるのは、西田がこのようなプロティノスの質料を、後の彼の思想においてキー・タームとなる「無」に重ね合わせている点である。

> 何等かの意味で規定されているものは形相となる。限界づけられているものも同様である。Beraubung〔剥奪〕というのは、凡ての性質を失い何等の性質もないものと云う意味である。しかし「物質」は非規定的であるといえば、もう「物質」ではなくなる。即ち das Unbestimmte selbst〔非規定的なものそれ自体〕が「物質」であると云うべきである。それ故「物質」は非有（das Nichtseiende）と云うことになる。……プロチノスの此処で云うている非有は、如何なる意味に於ても有になることの出来ぬものである。das Unbestimmte〔非規定的なもの〕は決して bestimmen〔規定〕されることの出来ぬものである。かく考えると「物質」は全く「無」に等しいものにな

る。（一四、三六四）

「質料は非規定的である」と言表することは、すでに質料に規定を与えていることになる。故にそれはもう質料ではなくなる。なぜなら「何等かの意味で規定されているものは形相となる」（一四、三六四）からである[14]。われわれは前節で、アリストテレスが『形而上学』Z巻第三章で言及した質料が、肯定的な言辞だけでなく否定的な言辞さえもそれについては述べ得ないとしたことと同様に、プロティノスの質料は「非規定的である」という否定的な述語づけさえもできないものであることを確認した。西田はこのような決して規定されることのない質料を、無に等しいものとみなしたのである。

しかしながら、プロティノス自身は質料を「無限定なもの」とか「欠如」としているが、「無」とは言い表していない。質料を見る魂は、暗闇の中の目がそれ自身暗闇と同じようなものとなり「見えない」という形で暗闇を見るように、「直観しないで直観する」という形で、それ自身が無限定なものとなる限りにおいて、かろうじて質料を把捉するとしていた。質料は、私生児的な空虚な思考によってのみ捉えられる形のないものでありながら、やはり確かに存在するものとして扱われていた[15]。これに対して西田はプロティノスの質料を「無」と捉える。それは両者の質料理解の間にひとつの違いがあることを示している。無限定なものから無を導く思考は決して突飛なものではない――それは形もなく大きさもなく、その他一切の形相を持たないとされていたのだから――にしても、質料を無とする見方は通常のプロティノス解釈とは言えないだろう。その後の西田の思想において「無」の概念が持つ重要性を考慮すれば、この違いは些細なことながらも見逃すことができない。

四　「働くもの」における質料の役割

一九二四年度の特殊講義から質料＝基体＝受容者としてのプロティノスの質料概念が西田によってどのように解されていたかを見、あわせて西田とプロティノスとの共通点および相違点を確認した。次に、この特殊講義と同時期に執筆された論文「内部知覚について」を中心にして、西田が具体的にどのような文脈において、基体＝受容者という質料概念を用いているかを読み取りたい。それによって、場所的論理の生成期とも言えるこの時期の西田の思想展開に、質料概念がどのように寄与したかということを見極めたい。

「内部知覚について」は、「場所」という語が初出する論文として知られているが、それに留まらず、この論文においてはその後の場所的論理の形成に必要であったと思われるいくつかの特徴が現れており、西田の思索にひとつの画期をなしたと考えられる。この、「内部知覚について」における西田の思索の変化について説明しておきたい。

本論稿の第一節で見たように、『働くものから見るもの へ』における西田の主要な関心は思想の論理化にあった。それは判断と直覚との必然的な関係を明らかにすることであった。判断と直覚とを分離せずに統一的に扱うには、直覚の自己限定によって判断が成立するという自覚的体系に依らなければならない。この問題を受けて、論文「内部知覚について」では、その第五節以降に、それまでは「反省作用其者が自己を直観する」（四、二八四）とか「精神的なるものが自己自身に還る」（三、二八三）というように再帰的な運動という形で説明されていた自覚が、その後も頻繁に繰り返されるような「自己が自己において自己を映す」という形で定式化される[16]。また、第四節において「無」に積極的な意義が見出されるようになり[17]、それに伴って「純なる形相」とか「基体なき作用」と言われていた「働くもの」の根底に、それを包む「働くと共に働かざるもの」や「基体なき作用の基体」が明確に据えられる[18]。この基体なき作

用の基体こそ、「働くもの」を成り立たせる「知るもの」、あるいは「見るものなくして見るもの」（三、二五五）である。こうして働くことは知ることの抽象的一面と考えられるようになる[19]。「基体なき作用の基体」と呼ばれる「知るもの」は、主語的には規定されず、それゆえもはや「主語となって述語とならないもの」ではなく、「述語となって主語とならないもの」として考えられる。これが後に主語的には捉えられない「超越的述語面」たる「場所」へと発展していくことになる。

さて、われわれが前節で見た「基体としての無限定な質料」が登場するのも、以上のような、論文「内部知覚について」における「働くもの」から「知るもの」への変遷においてである。まず、この論文「内部知覚について」においても基体が質料として考えられていることを確認した上で、この質料としての基体概念が西田の論の展開の中でどのような役割を果たしているかを考察したい。

第五節では、基体は不可知的なものであり無であると言われる。

> 真の基体は……判断の述語とはならないが、而もその主語となるものでなければならぬ。述語することができないと云う意味に於ては、それは不可知的と云い得るであろう、不可知的なるものは無とも云い得るであろう。併しかかる意味に於て不可知的なるものを可知的と考えざるを得ざる時、かかる意味に於て無なるものを有と考えざるを得ざる時、真の個体即ち本体の考が成立するのである。（三、三三七―三三八）

この引用では、はじめに真の基体とは「主語となって述語とならないもの」であるということが確認され、この基体そのものは述語付けができないのだから不可知的であり無であると言われる。基体が本論稿の第一節で見たように直覚

として考えられていたならば、それは「いつでも明白である」とされていたのだから、不可知的という理由のために「無である」と言われるのは奇妙なことである。ここで、不可知的な基体が単にわれわれに知られることのできない何かあるものではなく、積極的に無と言われていることは、プロティノスの無限定な質料としての基体という考えの影響を考慮しなければ理解しにくい。この推測が強引なものではないということは、右の引用の直後に「すべての事実的判断に於て実在がその主語となると考えられる主語〔基体、執筆者注〕とは、此の如き第一質料でなければならぬ」（三、三三七）と続けられていることからも分かる。

このように、不可知的な無としての質料というプロティノス経由の質料概念は、論文「内部知覚について」においても基体とみなされている。それでは基体であり受容者としてのこの質料概念は、西田の思想の展開の中でどのような役割を果たしているのだろうか。

先の引用で、西田は「無なるものを有と考えざるを得ざる時、真の個体即ち本体の考が成立する」と述べていた。この引用文が含まれる第五節の前半では、「個物とは如何なるものであるか」（三、三三七）が問われている。しかし単に「個物は直覚の概念化されたものである」として片付けられるのではなく、ここでは特に、個物を個物たらしめる「特殊化の原理」（三、三三七）が問題となっている。その上で、無である真の基体を有であると考えざるを得ないときに「真の個体すなわち本体の考が成立する」と述べられているのである。これは何を意味するのか。そもそも西田はなぜここで特殊化の原理を問題にする必要があったのか。これらの点について考察するために、まず先の「論理化の問題」に戻りたい。

西田は「「此花が赤い」という時、之に客観性を与えるものは何であるか」と問い、それは「直接経験の内容に外ならない」（三、三一五）と言う。「例えば、色の判断といっても、その根底に色の直覚がなければならぬ」（三、三一八）のである。

しかしながら、本稿第一節で見たように、判断の基礎は直覚であるという説明のみでは、直覚と判断との必然的な関係は明らかにならない。それゆえ、直覚がわれわれにとっていかに根本的な経験であろうとも、それは普遍的知識と離れ、「ますます神秘主義的色彩を濃く」していくのである。

そこで、西田は判断の「包摂構造」と直覚とを結びつけようとする。西田は包摂判断を判断の最たるものとする。それは一般が自己の限定として特殊を含むということである。たとえば赤は色という一般に含まれ、色は感覚的性質という一般に含まれる。ある一般はより高次の一般の自己限定として含まれる。判断の客観性も、この包摂構造に求められる。判断における特殊と一般との関係の正しさは、より高次の一般、すなわち直覚に含まれることによって保証される。そして、包摂構造が、単に特殊が外在的な一般によって含まれるのではなく、むしろ一般の自己限定として特殊が成立することを意味するならば、判断も直覚の自己限定として成立するのである。判断における包摂構造も、直覚的な一般者の自己限定という形式の表現と考えられる。こうして、直覚と判断との関係は、一般者の自己限定として説明されることになる。

「此花が赤い」という判断が客観性を持つには、その判断は直覚に基礎づけられていなければならない。色の直覚が色についての判断の基礎となるためには、言い換えれば、いかなる外的な作用の介入もなしに、色の直覚から色についての判断が必然的に導き出されるには、色という一般者が自己を限定することによってその判断を成立させている必要がある。「判断は一般的なるものが自己自身を叙述するより始まる」（三、三三一）のである。そして直覚が主客未分の直接的な経験である以上、一般者も色の一般者に留まらず、あらゆる経験内容を含んだより高次の一般者を想定しうる。

このことを西田は次のように説明する。

直接の経験に於ては、性質的なるものが、自己自身の内にあるのである、定立とは性質的なるものが、自己自身に還ることを意味する、自己自身の述語となる一般的なるものがその本体となるのである。判断は此の如き一般者によって成立し、判断の主語とは、此の如き一般者其者でなければならぬ。（三、三三〇）

西田は、判断を自己の限定として成立させるこの一般者を「具体的一般者」と呼び、判断の真の主語となる実在すなわち基体と捉えた（三、三四〇）[20]。このとき具体的一般者は「色として一般的なるとともに、此色として主語となるものでなければならぬ」（三、三四〇）。つまり、具体的一般者はこの場合には色としての一般者でありながら、それについて述語づけされるところの主語となる。言い換えれば、「一般的なるものが主語となり、特殊なるものが述語となると考えることができる」（同所）。具体的一般者は、無数の述語をそれ自身の特殊として含むのである。

直覚を一般者とすることで、判断を一般者の自己限定として説明することができたが、しかしながらこのような一般者は直覚が持つ現実性あるいは直接性を持ちうるであろうか。言い換えれば、「一般的なるものが主語となる」という説明によって、一般性とともに具体性をも併せ持つはずの具体的一般者が十分に言い表されているのだろうか。たしかにここまでの西田の論述における具体的一般者は、その内に無数の述語を自己の限定として含んだ述語の総体とも言うべきものである。しかし西田自身も言うように、このような「純なる形相ともいうべき具体的一般者」（三、三四五）は、「特殊が一般に於てあると云い得るのみ」（三、三四〇）であり、「空間の例に於ての如く、唯すべてがその中に含まれるのである、単に全体である」（三、三四一）。このような一般者は具体的一般者ではなく抽象的一般者と呼ばれるべきではないか。具体的一般者が真の具体的一般者として判断の基体となるには、それは内に無数の述語を含む最高次の一般性を持つ一方で、現実における唯一性を持っていなければならない。これを具体的一般者の具体性と呼ぶことにしたい。

直覚と判断的知識との関係は、西田によって、一般者の自己限定として説明されたが、このとき判断を成立させる一般者は、一般性とともに具体性をも備えている必要がある。「内部知覚について」の第五節で個物を個物たらしめる特殊化の原理が問われるのもこのような文脈においてである。個物は直覚の概念化されたものとして成立するのであり、個物の個物性は具体的一般者の具体性に求められる。具体的一般者が具体性を持つということは、自己限定という形式によって直覚と判断とを結合するために、またそれゆえ思想の論理化という課題を解決するために、なくてはならない契機なのである。

それでは具体的一般者が真に具体的一般者とみなされるには、何が必要であったのか。具体的一般者は、西田が言うように「此花は赤い」という判断をする際に、それについて当の判断が下される実在全体であるとされていたが、この具体的一般者が「単に特殊的なものを含む一般」であるならば、それはいまだ抽象的一般者にとどまる。抽象的一般者はすでに直接的ではなく概念的であり、その内にはやはり抽象的なものしか含みえない。単に「一般が特殊を含む」というだけでは、唯一的な真の具体的一般者とはならないのである。具体的一般者が具体性を持つには、それ自身の内に特殊化の原理を持たなければならない。この特殊化の原理を持った自覚的な具体的一般者が、「働くもの」と呼ばれる。

具体的一般者に具体性を与えるには、「一般が特殊を含む」ということとは逆に、「特殊が一般を含む」ということが可能でなければならない。つまり、「唯、特殊なるものが、特殊なるものとして、一般的なるものの位置に立つ時、即ち全体の位置に立つ時、始めて働くものとなる」（三、三四一）。特殊なるものが特殊なるままに全体の位置に立つとは、無としての質料が実在全体に重なるということを意味する。ここでは、具体的一般者が「純なる形相」（三、三四五）と考えられており、特殊が一般を含むとは、質料が形相を含むということと考えられている。

質料が単に判断の主語として基体たるのみならず、形相を含んだものでなければならぬ、特殊なるものが一般的なるものを含んで居なければならぬ。何処までも主語となって述語とならざる質料は無とも云い得るであろう、此の無なるものが積極的意義を有し、内に形相を含む時、それは働くものとなるのである。（三、三四〇）

質料としての基体は、「主語となって述語とならない」という定義を忠実に守ったものであり、どのような形相も持たない無であるが故に、あらゆる形相を受け入れる受容者、つまり「一般を含む特殊」である。無でありつつもあらゆる形相を受け入れる受容者であるこの質料を、具体的一般者と重ねることによって、西田は働くものを説明するのである。無としての質料は、あらゆる形相に場を提供する。あらゆる形相の総体である具体的一般者は、無と重なることによって初めて働くものとしての現実性を得るのである。それゆえ、「全体が無と合致せない間は、全体は抽象的一般たるを免れない」（三、三四一）ということになる。つまり具体的一般者の具体性も、この無である質料としての基体によって与えられるのである。働くものが成立するには、具体的一般者が基体として定立されるだけでは不十分であり、同時に無としての質料が基体としてみなされる必要があったのである。具体的一般者と無としての質料が重なりあったものである働くものは、「全体と無が合致」したものである。

先の引用で、「無なるものを有と考えざるを得ざる時、真の個体即ち本体の考が成立する」と述べられていた箇所も、この「本体」を働くものとみなすならば、理解されるだろう。つまり、働くものは無としての質料と有としての形相（具体的一般者）との合一であり、もはや有とも無とも言えないものである。働くものが成立するということは、この有と無との境界が無くなることであり、有と無とが転換しうるということである。その矛盾的な在り方は、次の西田の言葉にも表れている。

有と無とを対立せしめるものは亦有でなければならぬ。類似と非類似とを区別する類似の理念は何物にも類似せざるものである、有無を区別する有の理念は何処にもないものである、此意味に於て無と考えることができる（三、三三三、傍線執筆者）。

以上のように、「主語となって述語とならない」基体としての質料、言い換えれば、無なるものとして質料が、具体的一般者重ね合わされることによって、働くものの成立が説明されている。ここから、西田の論述に有を含んだ無、あるいは形相を含んだ質料という考えが散見されるようになる。次の論文「表現作用」では、意識の統一は自己自身の否定として無であり、しかも有に対する無ではなく、有を含んだ無であると言われている（三、三七一―三七二）。また論文「働くもの」においては、直覚と意味という両面の合一とは、「包理性的非合理性、包形相的質料なるが故に、単に映す鏡というべきものであろう」（三、三九四―三九五）とされている。

五　「場所」と「一者」における質料

前節で考察したように、西田がプロティノスから摂取した質料＝基体＝受容者という発想は働くものの成立に重要な役割を果たしていた。それ自身は形を持たないものでありながらあらゆる形をその内に成立させ、それに唯一性を与えるという質料概念には、後の場所の思想に通じるものがあると言える。西田自身も論文「場所」において、場所概念を説明する際にアリストテレスの「形相の場所」という考えを参照して、そのような自己自身を照らす鏡ともいうべき場所は、知識のみならず感情や意志もそこにおいて成立する「非論理的な質料とも考えられる」（三、四一九）と述べている。

しかしながら、無としての包形相的質料そのものを西田の「場所」と認めることはできないであろう。西田の「場所」が単に形相を包んだ質料であるならば、「無論プラトンの空間とか、受け取る場所とかいうものと、私の場所と名づけるものとを同じいと考えるのではない」（三、四一五）とは言われなかったであろう。西田は無としての質料をプラトンのような単なるイデアを受け取る場所として理解したわけではなかったし、プロティノスの質料概念から多大な着想を得ながらも、プロティノスにまったく同調して質料を一者からの流出の最下位に置いたわけでもなかった。

「場所」の概念に至るにはもう一歩の前進が必要であった。最終的な場所とは、「自ら無にして自己の中に自己の影を映す」（三、二四七）と規定されるように、それ自身は無でありながらそれ自身のうちにそれ自身の否定的な限定として形を成立させる自覚的なものである。西田は「単なる具体的一般者ともいうべき空間の如きものには質料はない。変ずるものはアリストートルの云う如く質料を有たねばならぬ。而も質料其者が判断するものである時、働くものとなる」（三、三四八）と言うように、働くものが成立するには、質料そのものが判断するもの、すなわち自覚的なものであることを主張している。しかしながら、やはり質料はあくまでも形相に対するものとして考えられており、無としての質料が意識的な自覚とどのように関係するかは明らかにされていない。西田が「形を含んだ無」から「形を自己自身の影として成立させる無」という立場へと移るのは、「先ず深く自覚的統一の根底に還って考えてみなければならぬ」（三、三七〇）と言い、意識的な自覚と、実体を質料と形相との結合体と考えるギリシャ的存在論との調停を試みた論文「表現作用」からであると考えられる。

プロティノスとの関連で言えば、西田は自身の「場所」概念と同様の思想を、「一者」に求めるのである（三、三七四）。プロティノスにおける一者からの発出論的構造と、西田における「絶対無の場所の自己限定」という自覚的構造とは、形あるものを「そこから」あるいは「そこにおいて」発生させるところのものとして近しい関係に立つ。西田が単に「有

を含んだ無」という考えから、「自己の中に自己の影を映すもの」と規定した「場所」概念へと至るには、論文「表現作用」以降の自覚の問題を追究しなければならないが、それは本論稿の範囲を超える。また、プロティノスの「一者」と西田の「場所」との類縁性についても、すでに卓越した研究があるので、詳細を述べることは控えたい(21)。ただし、一者と質料との関係を西田がどのように理解したかを明らかにすることは、中期西田哲学における質料概念の意義を見極めるうえで重要であると考える。

西田は、『働くものから見るものへ』の有名な序文が示すように、「形相を有となし形成を善となす泰西文化」(三、二五五)を尚ぶべきものと認めながらも、それに留保を付している。論文「場所」と同時期に執筆された論文「取残されたる意識の問題」の中で、「無の深い真の意義は希臘哲学には見出されない」(七、二一六)と言われるのも、プラトンやアリストテレスやプロティノスにおいては、質料と形相とが截然と分かたれ、形相の方向に根本的な実在が求められたと考えられたからである。西田はプラトンが『ティマイオス』中でイデアを父に、受容者を母に喩えた(50D)ことを受け、プロティノスの一者さえも「やはりそれはプラトンのティマイオスに於ける父の方向を押し進めたものであって、母の方向を推し進めたものではない」(同所)と論難する。ここから西田は次のように言う。

> 何処までも形相を有と考えた希臘哲学は、遂に場所という如きものに論理的独立性を与えることなくして終わった。場所という如きものは形相に対する質料と考えられ、有に対する無と考えられた。プロチノスの一者の如きもイデヤの方向に超越するに過ぎない、質料の問題は何時までも解決することなくして残された。私は上に述べた如く逆に質料的方向に於て形相的有と異なれる意義の有、即ち場所の客観性という如きものを認めることによって、形相と質料との問題にも異なった見方ができるではないかと思う。(七、二二三―二二四)

プロティノスの思想における感性的な質料は光（形相）を受け取る前の暗闇として、形相の欠如として、悪と考えられている（III4, 16）。感性的質料は一者の発出の最後のものであり、一者へと近づけば近づくほど形相的になるのである。一者は質料ではなく形相の先に見出される。これに反して、西田はプロティノスの一者を形相の方向ではなく質料の方向において捉えようとする。「〔プロティノスには〕最後の非規定的な「物質」が、直接「一者」と結びついていると云う考はないようであるが、そこが大切でないかと思う」（一四、三六六―三六七）。「私の考では、プロティノスの一者は、絶対無として、逆に質料的でなければならない」（九、三七五）。

プロティノスの思想における質料には二種あり、現代のプロティノス解釈においては、発出の最下位にある感性的質料に対して、直接に一者に接触する叡知的質料の重要性が認められている。この叡知的質料は、ヌースの無限定な作用（「まだ見ぬ視力」）として一者から直接に発し、一者を振り返ることで限定されたヌースとなる。そのため、「第一義的な認識であるヌースにおける叡知的質料は一者から直接に発し、一者に直に結びつくことにより、形相としての存在を作り出すものである」[22]。このような意味で、一者と質料とを近づけようとする西田の理解は（西田本人はそのことを考えていなかったであろうが）プロティノスのそれに近いと言うこともできる。

以上から、「場所」に比しうるプロティノスの「一者」についても、質料概念が重要な意義を持っていたことが分かる。ただ西田自身は、感性的質料と叡知的質料との区別を知ってはいたが[23]、プロティノスを参考する際にこの区別を無視している。叡知的質料よりも感性的質料の方を一者へと接近させているのである。これについての一つの裏づけとして、西田が『働くものから見るものへ』の中で頻繁に用いる鏡の比喩について見ておきたい。西田は、プロティノスが質料を鏡に喩えていることを紹介する。

プロチノスはまた「物質」を鏡に喩えている。イデヤが現れる時には、何かそれを映すものがなければならぬ。現象界がイデヤの影であるとすると、それを映すものがなければならぬ。……「物質」は全く受動的なもので、イデヤの映像がそれに映るに過ぎない。（一四、三六五）

ここから西田は、プロティノスにおいては感性的質料についてのものであった「鏡」の比喩を、一者についても適用している（一四、三五七）[24]。プロティノスの一者は、本来どのような働きもなさない。それは完全な一者であって多ではないのだから、未知の他なるものを持たないがゆえに知るということもないものである。それ自身は純粋な目的としてのみとどまり、そこから湧出した不完全なもの（質料）が、完全なものにより近い形相を映すのである。像の原型（形相）も、像を映し出すもの（質料）も、また像それ自体（結合体）も一者ではない。しかし西田は、一者を「実在を映す鏡と見做し、一者が自己自身を振り返り（映して）、それによってヌースが現れると解している（一四、二五三）[25]。また西田は、鏡の比喩や「映す」という語を「そのものをそのままに成り立たせる」という意味で用いることが多いのだが、実際のところプロティノスにおける鏡の比喩は、逆に、鏡に映し出されたものが模像として、「偽りのもの」であることを示す比喩として用いられている（III6, 7, 24）[26]。

西田は、後に「場所の自己限定」や「無の自覚」ということを説明する際に、「自己自身を映す鏡」というような鏡の比喩を用い、また知るということを「自己が自己において自己を映す」というように説明するが、そのように語られるときの「鏡」や「映し」の比喩の一つの決定的なルーツを、われわれはプロティノスの質料に求めることができるであろう。

西田はプロティノスの一者の思想を、自身の場所の思想と近しいものと評価している。ただし、西田の理解ではプロ

ティノスが一者を形相的に理解したのに対し、西田自身はそれを質料的に解している。さらに、「場所の客観性」をも質料的方向において見出そうとしていた。ここで積極的に評価された「質料」が、先にわれわれが見たような、具体的一般者と重なり合う無としての質料の延長線上にあることは間違いがない。

おわりに

以上で見たように、一方において西田はアリストテレスの基体概念を受容しながらも、基体を個物を成立させる直覚としての具体的一般者として捉えた。他方で、「主語となって述語とならない」という基体の定義突き詰めていくことによって、それ自身は無でありながらあらゆる形相を受け入れる基体という発想を得た。質料としての基体について言えば、アリストテレスは「主語となって述語とならない」という定義を忠実に実現した質料を、第一の実体とは認めなかった。それは、否定的言辞によってさえも表すことのできない、判断を超越した何か或るものである。それに対して西田は、第一の実体とも言うべき原理を第一質料の方向に求め、形なくして形あるものを包むという「無」の着想を得た。プラトンからアリストテレスを介してプロティノスに至る第一質料として理解された基体はそれ自身無であるが、具体的一般者と重ね合わされることによって、働くものを成立させるものとされた。

形相を内に含んだ無としての質料と「場所」との間にはまだ隔たりがある。なぜなら、無でありながら自己自身のうちに自己を限定し、働くものを成立させるもの、その意味で自覚するものこそ、無の自覚としての場所だからである。西田の「場所」の思想を明らかにするには、「自覚」の問題を詳しく検討しなければならない。しかしながら、西田が「場所」概念に至るまで根本的な実在と考えていた「働くもの」の成立にも、無としての質料概念は決定的な役割を果たしてい

た。この質料としての「無」と、後の場所論における「無にして見るもの」との間には明らかにつながりがある。さらに、西田が「場所」あるいは「見るもの」を説明する際にしばしば引き合いに出したプロティノスの「一者」についても、西田は質料と密接な関係を持つものと考えていた。このことを考慮すれば、この時期の西田における質料概念は、「働くもの」から「見るもの」への転回において、積極的な意義を持っていたと言えるであろう。

参考文献

阿部正雄、「西田哲学における場所の思想」、『理想』第五三七号、一九七八年。

板橋勇仁、「形と形を超えるもの――プロティノスと西田における「一者」――」、『新プラトン主義研究』第六号、二〇〇六年、三三―四五頁。

大熊治生、「一般者の場所から絶対無の場所へ」、河波昌編著『場所論の種々層――西田哲学を中心として――』、北樹出版、一九九七。

岡野利津子（一）、「プロティノスと西田幾多郎」、『西田哲学会年報』第五号、二〇〇八年。

岡野利律子（二）、『プロティノスの認識論』、知泉書館、二〇〇八年。

角田幸彦、「西田幾多郎の哲学とアリストテレス――自然、場所、実体、共通感覚――」、『明治大学教養論集』通号二九八、一九九七年、一―一二八頁。

加國尚志、「映すものと破るもの――西田幾多郎「場所」における鏡のメタファー――」、『立命館人間科学研究』第五号、二〇〇三年、九七―一〇六頁。

日下部吉信、「西田とギリシア哲学」、『立命館人間科学研究』第五号、二〇〇三年、七五―八三頁。

小林敏明、「逸脱するコーラと無化する場所――西田の「場所」概念をめぐって、『思想』第九九一号、二〇〇六年、二九―四四頁。

ニールス・グュルベルク、「対象の論理から場所の論理へ――

エミール・ラスクと西田幾多郎――」、河波昌編著『場所論の種々層――西田哲学を中心として――』、北樹出版、一九九七
常俊宗三郎、「場所の論理」、『人文論究（関西学院大学）』第四六巻一号、一九九六年、一―一三頁。
藤田正勝、「場所――根底からの思惟――」、日本哲学史フォーラム編『日本の哲学』第一号、二〇〇〇年、四三―五七頁。
山口義久、「アリストテレスの質料に関する一考察――「構成因」と「基体」」、『西洋古典学研究』第三一号、一九八三年、三二―四二頁。

注

（1）引用には新版『西田幾多郎全集』を用い、（巻数、頁数）の形で示す。
（2）たとえば、論文「直観と意志」においては次のように言われる。「知る我は働く我より大にして、之を包むと考えられるが、知る我も亦働く我の一である」（三、二八三）。知る我が働く我を包むものであるということが示唆されてはいるが、知るということの最も直接的にして確実な仕方である直観も、「純なる作用自身となることが直観することである」（三、二八四）と言われるように、結局のところ作用の自覚、言い換えれば意志の自覚に見出されるのである。論文「物理現象の背後にあるもの」でも、「働くものの内容は、唯働くことによってのみ知ることができる。此場合働くことは知ることであり、知ることは働くことである」（三、六六―六七）と言われており、働くものの底に知るものは考えられていない。もちろん西田は、彼自身が『働くものから見るものへ』の序で述べているように、『自覚における直観と反省』を書いたときから、「意志の根底に直観を考えて居た」（三、二五三）のだろう。しかし、少なくとも論文「内部知覚について」に至るまでは、そのようなことは決して明確には述べられていないのであり、いまだフィヒテの事行としての主客合一的な作用が根本的な原理として保持されている。
（3）阿部一九八七（一二二頁）。
（4）西田がアリストテレスの基体を個物として理解していたという見解は、これまでの場所論についての研究の多くに通じるものであるが、それらのほとんどがアリストテレスの基体概念がそもそも個物を意味しているという前提に立つ。西田の基体理解と関連して、アリストテレスの基体概念が単に個物のみに限らないということを指摘したものとして、前掲の角田一九九七のほかに日下部二〇〇三（八〇頁）を参照。
（5）グュルベルゲ一九九七は、西田の「場所の論理」の展開にとって重要な役割を果たすプラトンの場 χώρα も、論文「内

部知覚について」においてはプロティノス的な解釈を加えられており、また「アリストテレス的な問題をめぐっても、西田はプロティノス的に理解されたアリストテレスに還った」(一三九頁)という重要な指摘をしている。しかし、西田がアリストテレスの基体とプラトンの χώρα (ὑποδοχή) とをプロティノスの質料概念に沿って結合したということについては論じられていない。大熊一九九七も、西田の場所論とプラトンおよびアリストテレスとの関係について詳細に論じているが、そこでは、「西田は「主語となって述語とならない」という「個物」の概念、そして「述語」としての普遍者の概念をアリストテレスから受け取り、それにプラトンの「場所」の概念を加えて……」(一七八頁)というように、やはりアリストテレスの基体を個物としたうえでプラトンのコーラーと内容的にも区別している。そのほかにも、西田とプロティノスについては、板橋二〇〇六および岡野二〇〇八(一)を参照。

(6) 山口一九八三、三四頁参照。

(7) アリストテレスの著作からの引用には、出隆訳『アリストテレス全集』第一二巻(岩波書店、一九六八年)を用いた。

(8) ここでアリストテレスが述べている、離存性・独立性と個体性というのは、『形而上学』Δ巻第八章での実体の定義によると考えられる。Δ八では、以下の四つが実体と呼ばれている。①物体、あるいはこれら物体から構成されたもの(これが実体と呼ばれるのは、これらがほかの物事の主語つまり基体となるからであるとされている)、②そのような基体としての物体に内在してその原因となるもの、③これら諸物体の部分としてそれぞれの物体を限定しこれとして指し示すところのもの(たとえば物体の線や面といった空間上の枠)、④それのなにであるか(本質)。また、これらの四つを大別して、①を他のいかなる基体の述語ともなることのない「窮極の基体」、②③④を「これと指し示されうる存在であり且つ離れて存しうるもの」としている。前者は個体的な感覚的実体であり、後者は「離れて存するものであること」と「これと指し示しうるものであること」にあたる。

(9) 「およそ形相または形相を有するものは個別的にこれと呼ばれうるが、ものの質料的部分はそれだけでは決してそう呼ばれえない」(*Met.* Z, 1035a9)。

(10) プロティノスの著作からの引用には、田中美知太郎監修『プロティノス全集』(中央公論社、一九八七年)を用いた。ここで「素材」と訳されているのは ὕλη を指す。

(11) 当時の聴講者であった島谷俊三が筆記ノートをもとに文章化し、西田の死後、「プロチノスの哲学」と題して雑誌『東海人』に二回に分けて掲載された。現在、『新版西田幾多郎全

集』第十四巻に収録されている。島谷によれば西田は一九二四年度の講義で「アリストートルの形而上学」という題目のもと、プラトン、アリストテレス、プロティノスを講じた。これはそのうちのプロティノスに関する部分である。アリストテレスについての部分は、これも聴講者であった下村寅太郎によるノートが残っており、その翻刻が「アリストテレスの形而上学」として、同じく『新版西田幾多郎全集』第十四巻に収録されている。これらの講義録は旧版の西田幾多郎全集には収録されていない。

(12) 質料 ὕλη を指す。

(13) プロティノスは、「プラトンは質料を受容者と考えた」というアリストテレスの誤読を踏襲しており、西田もこれと同じようにプラトンの χώρα を解している。

(14) このような見解は、論文「表現作用」にも見ることができる。そこで西田は、通常言われている質料（銅像における銅のような材料）も、すでに形相が入り込んでしまっているものだとしている。

(15)「素材は〈空虚な名辞〉ではなくて、たとえ目に見えなくても、たとえ大きさを欠いていても、下に横たわっている何かである」(II4, 12, 23)。「もしこれら（性質と大きさ）が、そのそれぞれは漠然とあるだけだが、とにかく存在するのだとすれば、ましてはるかにそれ以上に素材は存在するはずだろう。感覚によってはとらえられないので、はっきりとは存在していないけれども」(II4, 12, 27)。

(16)「自己は自己の中に自己を映すのである。自己の内容を映す鏡は亦自己自身でなければならぬ、物の上に自己の影を映すのではない」(三、三五〇)。この直後に、「場所」という語が初めて使われる。

(17)「種々なる形は空間に於て成立するも、空間其者の形を論ずることはできない。此の如き意味に於ては、空間は形なきものと云い得るが、一方から云えば無限の形が之に於て成立する形以上の形を有すると云い得るであろう」(三、三三六)。

(18)「純なる作用とは尚知るものではない。働くものから知るものに進み行くには、純なる作用の背後に又何かが認められねばならぬ、働くものの背後に働かないものが認められねばならぬ。……働くものの基体は、働くと共に働かざるものでなければならぬ。而してかかるものを、我々は我々の自己に於て見るのである。我とは基体なき作用の基体である」(三、三四五－三四六) と言われる。

(19)「ヘーゲルが「すべての物は判断である」といった如く、所謂働くとは知ることの抽象的一面に過ぎないと考えることができるであろう」(三、三五二)。

(20) 補足として、西田が基体を具体的一般者と解釈したことの是非について触れておきたい。角田一九九七は、西田がアリストテレスの基体を個物と解したことと関連して、アリストテレスの『カテゴリー論』と『形而上学』のそれぞれにおける「第一実体」の対立について重要な指摘をしている。『カテゴリー論』においてアリストテレスは「主語となって述語とならない」基体を「このひと、この牛」のような個別者とし、「第一実体」と呼んだ。また個別者についての述語（性質）を「第二実体」と呼んだ。これに対して、『形而上学』では最終的に個別者の形相が「第一実体」として考えられている。つまり『カテゴリー論』と『形而上学』とでは、個別者と形相のいずれを第一実体とするかについての見解が異なるのである。『カテゴリー論』を偽書であるとする説もあるが、これに対して角田は、二つの著作の間には対立も矛盾もないとする。なぜなら「個別においてはひととか牛、犬という普遍的なものが一定の特殊性・具体性と共に現れている」のであり、「我々が第一次的に出会っているものは具体的普遍ともいうべきものである」（一九頁）からである。よって、『カテゴリー論』での第一実体は何らか普遍性を帯びた個別者、さらにはこの個別者を個別者として捉えさせる働き（形相）をこそ指しているのであって、『形而上学』における形相としての第一実体とも矛盾しない。ここから角田は、西田がアリストテレスを精査することなく「主語となって述語とならないもの」を個体とみなす誤りを犯したと主張する。しかしながら、われわれが本文において考察している通り、西田が摂取した基体概念はむしろ角田が言うような具体的普遍（具体的一般者）であった。角田の主張のアリストテレス解釈としての成否は判定できないが、アリストテレスの第一実体が具体的普遍として解釈されうるものであるならば、西田の基体理解も筋の通ったものであるということになるだろう。

(21) 板橋二〇〇六および岡野二〇〇八（一）参照。

(22) 岡野二〇〇八（一）（一〇〇頁）。

(23) たとえば第十二巻三六九頁参照。

(24) 他にも、「主語の超越は特殊の方向に無限に進むと同時に述語の超越は無限に一般の方向にすすみ、それが無限に一般となった無にして有を包むもの、絶対に映すもの Materie にして Plotin の das Eine を含むものを見ようというのです」（一八、三〇三―三〇四）。

(25) プロティノス解釈において、一者からどのようにヌースが流出するかは、大きな問題となっており、解釈が分かれる。岡野二〇〇八（二）（九一―一二〇頁）参照。

(26) これとともに、鏡の比喩は、質料は形相を受け取るものでありながらそれ自身は変化を被らないという、「質料の非受

「動性」も意味している。